

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：23302

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19532

研究課題名（和文）診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムの開発

研究課題名（英文）Development of a home care transition support system to strengthen symptom management by nurse practitioners

研究代表者

石川 倫子 (Ishikawa, Noriko)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：80539172

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムを開発することを目的に研究を実施し、以下の成果を得た。まず、面接調査により、在宅療養移行支援における診療看護師(NP)の役割として、看護師の症状マネジメントを強化していたことが示された。次に、修正版デルファイ法にて診療看護師(NP)の在宅療養移行支援に関する質指標を開発した上で、診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムを構築し、有識者と検討しその妥当性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムの構築は、早期に在宅療養移行支援に着手し在宅療養を維持するための支援が提供できる。また、患者や家族が在宅療養に慣れるまで診療看護師(NP)が在宅へ出向くこと、訪問看護師と連携し症状マネジメントを行うことで、療養生活が早期に安定し、病気とともに生きる患者・家族のQOL向上に寄与する。開発した診療看護師(NP)が行う在宅療養移行支援に関する質指標を構成する項目は、診療看護師(NP)の在宅療養移行支援における役割認識の実態を把握することや支援の指針として活用できる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a home care transition support system to strengthen symptom management by nurse practitioners, and the following results were obtained. First, an interview survey indicated that the role of nurse practitioners in supporting the transition to home care was to strengthen symptom management by them. Furthermore, using a modified Delphi method, a quality indicator was developed for supporting nurse practitioners in home care transition. Accordingly, a home care transition support system that strengthens symptom management by nurse practitioners was established and discussed with experts, and its validity was suggested.

研究分野：看護管理学

キーワード：診療看護師 症状マネジメント 在宅療養移行支援 特定行為

1. 研究開始当初の背景

本研究において、診療看護師(NP)とは、日本 NP 教育大学院協議会が定義している「対象者の QOL の向上を目指して、対象者の「症状マネジメント」を、自律してタイムリー、かつ、効果的・効率的に行うことができる看護職」と定義する。また、大学院修士課程を修了し、特定行為を医師の手順書に基づき実施できる看護師である。医療が地域医療完結型へと変化する中で、在宅医療を支える看護師として診療看護師(NP)の役割が期待されている。

在宅療養移行支援(Transitional care)の目標は、患者が病気や老いと向き合いながら退院後の新しい療養生活を継続できるよう支援することであると考えられる。そのために退院支援チームの中心的な役割を果たしている看護師には、患者の退院後の療養生活を見据えた医療上および生活・介護上の課題をアセスメントし、在宅療養が維持できる力を高めるための指導を行う能力が必要である。しかし、病棟看護師は「在宅で起こりうる問題の予測・予防、ケアマネジメント」が十分にできていないと指摘されている(潮:2013)。それに加えて、複数の疾患をもつ高齢患者の増加に伴い、医療ニーズの高い患者の在宅療養移行支援が増えているが、看護師の「退院後の患者の生活に影響を及ぼす病態の把握」や「シンプルな薬剤管理」、「簡便な医療処置への変更」など、在宅での医療上の課題に関しての実施率が低いとされている(丸岡:2011)。一方、診療看護師(NP)が訪問看護ステーションで働くことで、利用者層が認知症者で医療処置のある人や医学的判断が求められる重症者に変化すると実践報告されており(光根:2015)、医療ニーズの高い患者の在宅療養生活の継続に貢献している。患者の在宅療養移行をスムーズにかつ安心して療養生活を継続するためには、看護師の患者の病態と生活を包括的にアセスメントし、治療を選択できる力、要するに症状マネジメント力をつける必要がある。そこで、診療看護師(NP)が在宅療養移行支援チームに加わることで、看護師、延いてはチーム全体の症状マネジメント能力が強化するのではないかと考えた。本研究では、診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムの開発に取り組み、在宅療養移行支援力の質向上に貢献することを目指して研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムを構築し、その有用性を検討することである。そこで、3つの目的により研究を進めた。

- (1)目的1:実際に患者・家族に対する在宅療養移行支援に関わっている診療看護師(NP)の役割を明らかにし、病棟看護師や訪問看護師、多職種と協働する中での連携システムを考える一助とする。
- (2)目的2:診療看護師(NP)における在宅療養移行支援に関する質指標を開発する。
- (3)目的3:診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムの構築し、有用性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 患者・家族への在宅療養移行支援における診療看護師(NP)の役割

病院に勤務し在宅療養移行支援を実践している診療看護師(NP)6名を病院8名を対象に、2019年10月~2020年12月に対面もしくはオンライン会議システム(Zoom)にて半構成的面接を実施した。研究参加者の選出は、ネットワーク標本抽出法(スノーボール・サンプリング)で行った。

面接内容は、診療看護師(NP)として行った在宅療養移行支援が診療看護師(NP)の役割として認識した行動と捉え、診療看護師(NP)として行った在宅療養移行支援内容を具体的に語ってもらった。面接内容は研究参加者の許可を得て録音し、面接により得られた全データを分析対象とし、逐語録を作成し、質的記述的に分析した。

(2) 診療看護師(NP)における在宅療養移行支援に関する質指標の開発

本研究では、修正版デルファイ法(the modified-delphi methodology)を用いた質指標開発を行った。

質指標案の作成

診療看護師(NP)の在宅療養移行支援に関する国内外の文献や(1)の研究結果をもとに、質指標の構成概念を明らかにし、質指標を作成した。

在宅療養移行支援の経験豊富な診療看護師(エキスパート)による質指標案の評価(郵送調査)

在宅療養移行支援の経験豊かな診療看護師(NP)をエキスパートとし、研究対象者10名に質指標案の評価に関する質問紙を郵送法による無記名自記式にて調査した。調査内容は、質指標案の妥当性、実施可能性、重要性、適切性で、9段階にて評価をしてもらった。各指標の妥当性・重要性・実施可能性、適切性の評価の平均値を算出した。質指標の削除する基準は、妥当性・重要性・

実施可能性のすべてが平均 7.5 以下の指標とした。また、妥当性と重要性のいずれかが 7.5 以下の項目は実施可能性の平均点を考慮しながら削除の対象とするかを検討した。調査は 2 回行った。

診療看護師(NP)における在宅療養移行支援のエキスパートパネルによる質指標の修正・洗練
研究メンバーと在宅療養移行支援の経験豊かな診療看護師(NP)でテレビ会議システム(Zoom)にて検討会議(エキスパートパネル)を行い、評価結果をもとに各指標の内容を検討し修正した。エキスパートパネルは 2 回行い、2 回目で質指標を決定した。

エキスパートの選出

以下の要件を満たす診療看護師(NP)とした。選出方法は、ネットワーク標本抽出法で行った。

- ・本研究の定義を満たす診療看護師(NP)であること
- ・病院で勤務し在宅療養移行支援を実践している診療看護師(NP)であること
- ・診療看護師(NP)としての経験年数が 5 年以上であること

(3)(1)(2)の結果をもとに、診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムを構築し、その妥当性を有識者で検討した。

なお、本研究は研究代表者が所属する大学の倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

(1) 患者・家族への在宅療養移行支援における診療看護師(NP)の役割

患者・家族への在宅療養移行支援における診療看護師(NP)の役割について、診療看護師(NP)は患者・家族への在宅療養移行支援を行う際には【再入院をさせない】という使命感を持って役割を担っていた。患者が病気を発症した段階から、診療看護師(NP)は【患者・家族に症状を管理できるように導く】ことをしていた。治療のための入院が決まると、患者の病状や日常生活の自立度を見据えて【在宅療養への目処をつける】とともに、それに応じて【症状管理できる在宅療養支援体制を整える】、【在宅で継続できる特定行為を実施する】ことをしていた。新しい在宅療養生活の始まりの段階では、患者や家族、在宅ケアスタッフが【慣れるまで在宅に出向く】とともに、在宅療養で新たに現れる症状に対して【訪問看護師と連携して症状マネジメントを行う】ことをしていた。また、終末期の患者・家族には外来受診時から在宅看取りまで一貫して診療看護師(NP)は【患者に家族と最期まで向き合う】ことをしていた。この在宅療養移行支援の過程で、診療看護師(NP)は患者・家族への在宅療養移行支援を円滑に行うために【在宅療養に向けてのチームの架け橋となる】、【看護・介護スタッフの在宅療養支援の質向上に努める】役割を担っていた。

診療看護師(NP)は、患者や家族、在宅ケアスタッフが【慣れるまで在宅に出向(く)】き、患者の生活と症状に合わせた薬物調整や【訪問看護師と連携して症状マネジメントを行(う)】っていたこと、<在宅スタッフの症状アセスメントの質を高める>ことをしていた。これらから、診療看護師(NP)が在宅療養移行支援に関わることによって、看護師の症状マネジメントを強化していたことが示唆された。

(2) 診療看護師(NP)における在宅療養移行支援に関する質指標の開発

質指標案の作成

(1)の研究結果で抽出されたカテゴリーを主に、質指標の構成概念 10 カテゴリーを明らかにし 50 指標からなる質指標の原案を作成した。

1 回目のエキスパートによる質指標案の評価とエキスパートパネルによる質指標の修正・洗練

1 回目の質指標案の評価の回収は 10 名中 9 名(回収率 90%)ですべて有効回答であった。

質指標案の妥当性・重要性・実施可能性・適切性のすべてが平均 7.5 以上の指標は、50 指標中 28 指標であった。【患者・家族への在宅療養生活指導の実施】、【在宅で継続できる特定行為の実施】、【医療チームにつなぐ】、【訪問看護師と連携しての症状マネジメントの実施】に関する指標はすべて平均 7.5 以上であった。

一方、質指標案の妥当性・重要性・実施可能性・適切性すべてが平均 7.5 以下の指標は、50 指標中 7 指標であった。7 指標は、「8. キーパーソン以外の家族に治療に関して話をする」、「29. 本人らしい生活が維持できる間隔で電話訪問をする」、「33. 同居していない家族に電話で患者の病状悪化の確認を依頼する」などであった。

1 回目のエキスパートパネルによる質指標の修正・洗練について、参加者は研究メンバー 3 名と在宅療養移行支援の経験豊かな診療看護師(NP) 4 名であった。質指標の削除する基準を用いて検討した結果、妥当性・重要性・実施可能性・適切性のすべてが平均 7.5 以下の 3 指標「8. キーパーソン以外の家族に治療に関して話をする」、「29. 本人らしい生活が維持できる間隔で電話訪問をする」、「33. 同居していない家族に電話で患者の病状悪化の確認を依頼する」を削除した。また、妥当性のみ平均 7.5 以上であった「22. 患者・家族の状況を受け入れてくれる訪問看護師と在宅医を探す」は、『診療看護師(NP)よりも退院調整看護師やソーシャルワーカーが行っている』という意見から削除とし、計 4 指標を削除とした。

2 回目のエキスパートによる質指標案の評価とエキスパートパネルによる質指標の修正・洗練
2 回目の質指標案の評価の回収は 10 名中 7 名（回収率 70%）ですべて有効回答であった。
質指標案の妥当性・重要性・実施可能性、適切性のすべてが平均 7.5 以上の指標は、46 指標
中 18 指標であった。このうち 1 回目から新たに加わった指標は、「1. 病状や治療の場所・方針か
ら在宅で看れるかを見極める」、「23. 在宅スタッフへ治療・医療処置を指導する」、「38. 家でなく
なる本人の最終的な意思を確認する」、「39. 患者・家族で最期の過ごし方を話せるようにする」、
「40. 家族に在宅看取りの意思を聴く」の 5 指標で、【 . 患者に家族と最期まで向き合う】の 7
指標すべてが妥当性・重要性について平均 7.5 以上になった。一方、質指標案の妥当性・重要
性・実施可能性・適切性すべてが平均 7.5 以下の指標は、46 指標中 4 指標であった。4 指標は
「3. 予後から在宅療養できる期間を予測する」、「4. 患者の生活環境と病状から外来受診の間隔
を予測する」、「29. 家で家族としてできる役割を見つけ、果たせるようにする」、「30. 家族が患者
のつらさに対応できるようにする」であった。
2 回目のエキスパートパネルには、研究メンバー 3 名と在宅療養移行支援の経験豊かな診療看
護師(NP)2 名が参加した。妥当性・重要性・実施可能性・適切性のすべてが平均 7.5 以下の 4 指
標について、診療看護師(NP)に必要な指標との意見から削除しなかった。

以上から、診療看護師(NP)が行う在宅療養移行支援に関する質指標は、10 カテゴリー 46 指標
で構成された。この質指標は、特に【 . 患者・家族への在宅療養生活指導の実施】【 . 在宅
で継続できる特定行為の実施】【 . 医療チームにつなぐ】【 . 訪問看護師と連携しての症状
マネジメントの実施】【 . 患者に家族と最期まで向き合う】が診療看護師(NP)としての特徴を
もつことが示唆された。

(3) 診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援システムの構築
これまでの結果から、診療看護師(NP)による症状マネジメントを強化する在宅療養移行支援
システムを構築し、有識者に提案し検討した。その結果、妥当性が示唆された。
コロナ禍の中、臨床調査を実施することはできなかった。
今後は質指標の信頼性の検討やシステムの臨床での実用性を検討する必要がある。

引用文献

- 1) 潮由美子, 森下安子(2013): 在宅移行期における訪問看護師が取り組む病棟看護師との協働,
高知女子大学看護学会誌, 38(2), 108-117.
- 2) 丸岡直子, 洞内志湖, 川島和代他(2011): 病棟看護師による退院調整活動の実態と課題 - 退院
調整活動質指標を用いた調査から -, 石川看護雑誌, 8, 29-39.
- 3) 光根美保他(2015): 訪問看護ステーションにおける診療看護師(NP)導入前後の実態調査, 看
護研究, 48(5), 452-455.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Noriko Ishikawa
2. 発表標題 The role of nurse practitioners in providing assistance to patients and families to transition to home nursing
3. 学会等名 The 7th Annual Meeting of Japan Society of Nurse Practitioner
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------